

ボートB級審判 宮城の女性で初めて合格

宮城県登米市の加納菜美さん（31）が、宮城県内の女性で初めて日本ボート協会公認B級審判員の資格を取得した。国体やインターハイなどのジャッジができる資格で、今年から本格的に全国を飛び回る機会が増えそうだ。シーズンを前に、「レースの主役である選手が力を発揮できるよう裏方として支えたい」と意気込む。

加納さんは市内の佐沼高在学中、ボート部に所属して国体やインターハイに出場した。1年生の全国選抜大会でクオドルプル8位入賞が最高成績。卒業後は市社会福祉協議会に勤務し、競技を離れた。

市内には県長沼ボート場があり競技が盛んだが、審判など競技役員の人手は不足気味。このため「後輩たちに部活で良い思い出をつくってほしい」と、19歳で地方大会の審判が可能なC級を取った。多忙の中、河北レガッタや中高生の県大会の審判を担う。

審判の技量に優れ、数年前に周囲からB級取得を勧められていた。なかなか自信を持てずにいたが、A級審判だった石巻市の先輩男性が東日本大震災の津波で亡くなり、決意。「『期待している』と言ってくれた先輩のために」とB級取得に努力し始めた。

日本ボート協会の宿舎研修に参加するなどして技術を磨き、2年前に学科に合格。昨年7月、実技試験を通った。大会審判長を務められるA級はB級取得後6年後に取得可能だが、「今は考えていない」という。

審判の仕事は多い。各ボートがきっちりそろったタイミングでスタートを告げるほか、ゴールの順位を判定したり審判艇に乗って違反がないかを見極めたりする。競漕規則も頭に入れておかなければならない。無償だが、「ボートが好きだから」と労をいとわない。

とめ漕艇協会の江田勝正副理事長（57）は「判断力も指示のタイミングも抜群だ」と太鼓判を押す。加納さんは「選手が悔いなくオールをこげるよう手助けしたい」と話す。



審判員の服装で笑顔を見せる加納さん

拡大写真